



2012年7月九州北部豪雨発生 激流に耐えた石橋にも 新たな保存の危機が！



筏場眼鏡橋(大分・日田市／県指定文化財)
大分県内現存最古のめがね橋は、右岸側取付護岸、壁石などが流失し、輪石のみの姿となっていた。撮影／賛田 岳和(昨年7・28)

昨年7月の九州北部豪雨は、各地の観測史上1位の値を更新する記録的な豪雨だった。河川の氾濫や土石流により、死者・行方不明者を出し、住居損壊、土砂災害、浸水被害、停電、交通障害などが発生。福岡・大分・熊本県を中心に各地の石橋も流失、損壊した。本年2月3日現在確認できた状況を3面の表にまとめたが、その他にも被害が確認された場合は、資料整理部または広報部宛てに連絡をいただきたい。(広報部)

気象庁は2012年7月11～14日の4日間の降水量を集計し、15日に速報を発表した。集中豪雨に見舞われた地域で上位は、熊本県阿蘇市阿蘇乙姫816ミ、大分県日田市椿ヶ鼻656ミ、福岡県八女市黒木649ミ、同県久留米市耳納山602ミ、熊本県南阿蘇村阿蘇山570ミ。4日間降水量を7月1ヶ月間の平均降水量と比較すると上位は、福岡県八女市黒木の171%、福岡県久留米市耳納山の168%、熊本県阿蘇市阿蘇乙姫の143%、久留米市久留米の142%、日田市日田の139%。他にこの値が120%を超えた地域は、熊本県菊池市、福岡県

柳川市、大分県竹田市と中津市耶馬溪だった。

石橋の被害も、豪雨に見舞われたこれらの地域と重なる。流失した石橋は、福岡・八女市の梅ヶ谷の眼鏡橋、同市の下松尾の眼鏡橋、熊本・南阿蘇村の黒川橋。福岡・八女市の関屋橋は完全流失を免れたものの、取付護岸が流失して輪石がずれ、アーチがつぶれるように変形した。同橋は市指定有形文化財であることから移設し保存する方向で検討されているが、未曾有の豪雨災害を被った同市では現在のところ、その予算の見通しが立っていないようだ。同市の国道442号線に架かっていた須崎橋は、橋台基礎が損壊したため撤去され、現在は架け替え工事が進行している。大分・日田市の筏場眼鏡橋(県内現存最古)は、取付護岸や壁石が流失したが、なんとか輪石だけは残った。同橋は県指定文化財だが、今後の豪雨または大きな地震発生の可能性を考えると、保存の危機にあると言えるだろう。

多くの石橋は、被害を受けながらも激流に耐え、記録的な豪雨に対し、あらためて耐久力の高さを実証した。ただその耐久性により、保存の危機が訪れた石橋もある。

(次面につづく)

中面の案内

2面 九州北部豪雨 激流に襲われた石橋
6面 めがね橋の構造と強さ[3](軸丸 英顕)

4面 平成24年度 石橋構築・修復技術者育成事業
7面 I♡めがね橋(上塚 尚孝)

2012年7月九州北部豪雨発生 激流に襲われた石橋

九州北部豪雨で福岡・大分・熊本の各県の石橋が流失、損傷の被害を受けた。山間部で大規模な土砂崩れが起こり、倒木や倒壊した建物などのがれきが水位を増した川を流れ、激しく石橋にぶつかった。激流となった川の水圧に長時間押され、それでも残った石橋は、記録的な豪雨に対し、その耐久性を実証した。

写真提供／賛田岳和、中村まさあき（＊）



宮ヶ原橋（福岡・八女市） ひ・ふ・み・よ橋の「よ」、4連アーチ。川の水位は路面を超え、勾欄と路面下の中詰め土砂が流れ出て、右岸側の取付護岸は大きく破損した（昨年8.12）



下松尾の眼鏡橋（福岡・八女市）
豪雨により全て流失。写真は2004年の在りし日の姿



梅ヶ谷の眼鏡橋（福岡・八女市）
豪雨により全て流失。写真は2006年の在りし日の姿



洗玉橋（福岡・八女市／市指定文化財）
ひ・ふ・み・よ橋の「ひ」、単アーチ。壁石に痛ましい損傷が残る（昨年8.12）



寄口橋（福岡・八女市）
ひ・ふ・み・よ橋の「ふ」、2連アーチ（昨年8.12）



大瀬橋（福岡・八女市）
ひ・ふ・み・よ橋の「み」、3連アーチ（昨年8.12）



栗林橋（福岡・八女市）
土石流が大量に川に流れ込んだが、橋はよくその圧力と衝撃に耐えた（昨年8.12）

「ひ・ふ・み・よ橋を守る会」結成へ

福 岡・八女市の星野川に架かる、上流から1連（洗玉橋）・2連（寄口橋）・3連（大瀬橋）・4連（宮ヶ原橋）の石橋、通称「ひ・ふ・み・よ橋」も豪雨により被害を受けた。倒木や倒壊した建物のがれきが勢いを増した星野川に流れ込み、石橋を襲った。

拱矢10㍎の洗玉橋では水面が一時、要石の高さにまでなつたとみられ、流木や倒壊した建物のがれきなどが橋にぶつかったようだ。輪石や壁石がはく離し、左岸側の輪石の内側に亀裂が入り、ずれが広がっている。同橋は肥後種山石工の橋本勘五郎を棟梁に1893（明治26）年に架設された単二アーチ橋。径間22・5㍎は福岡県最大で、八女市指定文化財に登録されている。

2連の寄口橋は、左岸側の取付護岸が流失し、勾欄（こうらん）・路面が損傷、輪石の一部に亀裂が入り表面がはく離した。同橋は八女郡川崎村の山下佐太郎を石工棟梁に1920（大正9）年に架橋。

3連の大瀬橋は、橋台・橋脚が損傷し、右岸側取付護岸と勾欄の一部が流失、路面の一部が陥没した。同橋は八女郡北川内村の萩本卯作を石工棟梁に1917（大正6）年に架橋。

「ひ・ふ・み・よ橋」で最も下流に架かる4連アーチの宮ヶ原橋は、4橋のうち最も被害が大きかった。右岸側取



黒川橋(熊本・南阿蘇村)
立野ダム計画では水没する運命にあったが、豪雨で全て流失。写真は2004年の姿



須崎橋(福岡・八女市)
橋台基礎が破損したため、架け替えられている。写真は2010年の在りし日の姿



関屋橋(福岡・八女市/市指定文化財)*
壁石も取付護岸も流失し、ずれて変形した輪石のみが辛うじて残った(2.3)



岩下橋(熊本・菊池市)*
右岸側の壁石が損壊し輪石がむき出しになった(1.29)



耶馬溪橋(大分・中津市/県指定文化財)
8連アーチ橋。勾欄の一部が流失(昨年7.8)

住民が市に馬溪橋の架け替えを要望



馬溪橋(大分・中津市/市指定文化財)
激流に耐えた5連アーチだが、石橋が2度の浸水被害の要因と、地元の住民からコンクリート橋への架け替えの要望が市へ提出されている(昨年7.8)

..... 九州北部豪雨による石橋の被害状況 (2013.2.3現在)

福岡 ◇梅ヶ谷の眼鏡橋(八女市長野): 流失

◇宮ヶ原橋(八女市長野): 本体の中詰土流出、右岸側取付護岸破損、路面と勾欄流失ほか

◇大瀬橋(八女市上陽): 橋台・橋脚損傷、右岸側取付護岸倒壊、路面と勾欄の一部流失ほか

◇寄口橋(八女市上陽): 橋脚の洗掘、左岸側取付護岸破損、路面の一部陥没、勾欄の一部流失ほか

◇洗玉橋(八女市上陽): 輪石や壁石の一部に損傷、取付護岸損傷、路面と勾欄の一部損傷

◇栗林橋(八女市上陽): 輪石や壁石、取付護岸に損傷

福岡 ◇関屋橋(八女市黒木): 基礎・輪石がずれ、他は流失

◇下松尾の眼鏡橋(八女市黒木): 流失

◇中名眼鏡橋(八女市黒木): 壁石などが損傷

◇須崎橋(八女市黒木): 橋台基礎損傷し架け替え

大分 ◇馬溪橋(中津市耶馬溪): 勾欄の一部流失

◇耶馬溪橋(中津市本耶馬溪): 勾欄の一部流失

◇筏場眼鏡橋(日田市高井): 輪石のみ残り壁石・取付護岸が流失、輪石にずれ

熊本 ◇黒川橋(南阿蘇村): 流失

◇岩下橋(菊池市): 右岸側壁石損壊、輪石にずれ

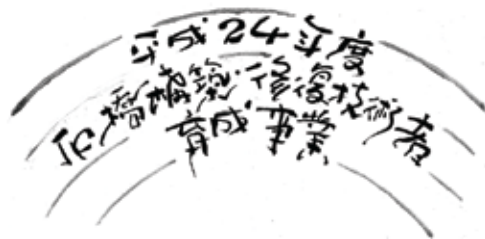
石橋を守るためには、「ひ・ふ・み・よ橋」のように日頃から石橋を地域の宝と位置づけ、住民が中心となった保護活動が望まれる。

(2013年2月3日)

石橋を守る動きがある一方で、大分・中津市の山国川に架かる馬溪橋では、石橋のために両岸に深刻な浸水被害をもたらしたと、付近の住民が撤去・架け替えを市に要望した。同橋は市指定文化財だが、住民らが署名を集め、地域の小学校・保育園・郵便局などの代表なども署名している(昨年9・11朝日新聞より)。

付護岸が損壊、記念碑が倒れ地中に埋没し、勾欄が全て流失、路面下の中詰め土砂が流れ出て、輪石が一部開いた。橋には流木やがれきが何度も激突したとみられるが、それでも完全に流失することなく、橋は激流に耐え抜いた。

災害後、八女市の久間正一・会員から本会へ連絡があり、建設会社社長の尾上一哉・会員と建設コンサルタントの中村秀樹・会員の2人が現地を訪問し、損傷の状態を調査。現地住民も9月に「ひ・ふ・み・よ橋を守る会」(久間正一・会長)を結成し、市長に修復・現地保存を要望。この動きは福岡のRKB毎日放送のドキュメンタリー番組「奔流に耐えて」星野川の石橋 千年の知恵」として、九州各地で放送された。



肥後種山石工技術継承講座

経験重ね腕を上げる受講者たち

2年目となった2012（平成24）年度の肥後種山石工技術継承講座は、昨年9月15日に開講し本年2月2日に閉講式が行われた。本年度は新たに受講者2人が加わり、石橋の新規架設、古い石橋の補修、解体保存されていた石材を使った復元工事までを経験する機会が設けられ、実習を主体とした実践的な内容で行われた。

写真提供／尾上一哉、中村まさあき（＊）



開講式の様子（昨年9.15）

●豊富な実習

開講式後の第1回講座は、昨年度の講座内容をまとめたDVDビデオを使った座学が行われた。第2回は、西田橋のある鹿児島市の石橋記念公園を訪問。同橋の移設復元工事の際、石工棟梁を務めた竹部光春・師匠（肥後種山石工技術継承者）の解説で、石橋記念館、西田橋、高麗橋、玉江橋を見学した。川底や壁石の奥の中詰めなど見えない箇所構造をはじめ、当時のエピソードを交えた貴重な話を聞き、技術を学んだ。

第3回は、次回以降に実習を行う予定の現場を訪れ、調査と作業手順などについて検

討。そして第4回と5回の2

日間、川内田堀切橋の補修作業を行った。第6回以降の講座は、昨年度講座で実習橋を架けた緑地広場内へ2橋目のめがね橋（緑地広場A橋）の架設、および、宇城市が発注した須ノ前橋の復元工事に受講者も任意参加するかたちで実施。2つの工事はほぼ同時に進行した。講座は土日祝日などに実施された17回に加え、平日実施の任意参加実習が約20回に及んだ。

●現場で伸びる

川内田堀切橋（熊本・御船町）の壁石補修、緑地広場A橋（同・山都町）の新規架設に加え、須ノ前橋（同・宇城市）の

川内田堀切橋

川内田堀切橋は、御船町滝尾の広域農道に架かる川内田大橋（コンクリート橋）下の谷にある。右岸側にある幅約2mの自然の巨石をアーチ基底部に利用した径間2.45mの単一アーチ橋。過去の豪雨により壁石や路面が損壊した状態のままだった。



補修を終えた川内田堀切橋＊



川内田堀切橋現地調査。周辺には草が生い茂り、アーチ中央部分の壁石は流失していた（昨年10.13）



川内田堀切橋の補修工事中的風景（昨年10.27）

受講者たちは、残った壁石の形状に合うよう、同じ材質の新しい石材（阿蘇溶結凝灰岩）を成形して積み、小石を中詰めし2日間で完成させた。見事な出来栄えた。

地元住民は補修工事の前に周辺の草を刈り、植栽を行うなどの整備を行い、この場所を大事に管理している。



鹿児島市の石橋記念公園で、西田橋について解説する竹部光春・師匠(昨年9.22)

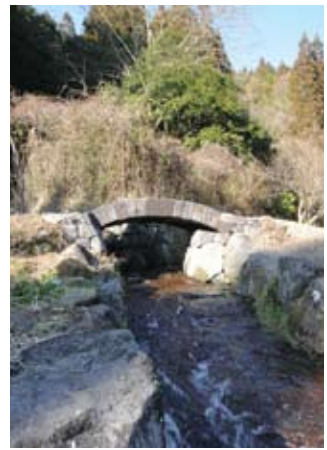


2011年度の講座で受講者は、山都町緑地広場内のひょうたん池に実習橋を架けたが、緑地広場A橋はそのすぐそばの小川に架かる。アーチ中央部の反りが少なく通行に都合のよい、径間2・26m、橋幅1・5mの扁平な「6分の1円」アーチ。緑地広場にまた1つ、めがね橋が増えた。



中央部の高さを感じない路面*

緑地広場A橋



緑地広場A橋のアーチは非常に扁平*

復元(任意参加)といった、タイプの異なる各工事を経験し、受講者たちは各現場で貴重な学びを得たようだ。技術を指導する竹部師匠は、川内田堀切橋補修の際、「学びながら皆、どんだん腕を上げている」と感心していた。

閉講式の後、受講者の山下勇輔さんは「どの石を核にして配置すればいいか、実習では考えながら仕事を進められた」と、石組みのバランスについて語り、荒木大人さんは「竹部師匠の手のひらは思った以上に柔らかかった。無駄な力を使わないからまめでもできないし、手のひらも柔らかいのだろう」と、師匠が扱う玄翁(げんのう)の力の入れ方について印象を語った。

尾上一哉・実行委員は「受講者は皆とても意欲的で、事前に頭の中で実習の準備をしていたようだ。具体的な段取りがしっかりと頭に入っていて、石工としての自覚が感じられる」と受講者の意識面を喜ばしく感じている。上塚尚孝・実行委員長は、「2年目になり、工事の進め方などについ

て、受講者間の言葉のやり取りはとても素直でスムーズ」と、尾上委員のチームづくりの良さを指摘した。

●頼れる石工集団に

「コンクリートを使った修復は、修復ではない。それは石橋に人為的な損傷を与える行為に等しい」と語る尾上委員。正しい修復を広げるためにも「種山石工集団が培った伝統的な石橋構築・修復技術を活用し、地域産業を興したい」と思いを語る。その思いの中には郷土愛もにじむが、昨年の九州北部豪雨のような災害を想定し、万が一の場合にも備えておきたいとの意識がある。通潤橋のように巨大な石橋の修復も可能な、頼れる石工集団の養成を目指しているのである。

九州北部地方では昨年、豪雨により多くの石橋が損壊した。文化財に指定された石橋に対しても、撤去の要望が出された橋もある。本会としては石橋の保存活動とともに、受講者がさらに腕を磨き、活躍できる場を広げたいところだ。(広報部)

須ノ前橋

須ノ前橋は宇城市不知火町松合地区にある。1867(慶応3)年架橋。径間4・5m、橋幅2・8mの単二アーチ橋だ。



完成した須ノ前橋(2・10)*

かつてまちの東には、大蔵宮の脇から須ノ前橋の下を浦ん谷川が流れていたが、川は現在、暗きよを流れているため、復元された橋は「白壁土蔵のまち」のモニュメントのように見える。

松合は八代海に面した港町。江戸期は海上交通の拠点として栄え、長崎港を経由した中国向け海産物(干しナマコやフカヒレなど)で財を築いた商人たちがいた。まちの西を流れる春の川に架かる松合橋(1820年架橋・現存のほか、かつては浦ん谷川には宮ノ前橋、下須橋などのめがね橋もあったという。(上塚尚孝・実行委員長、6面に関連記事)



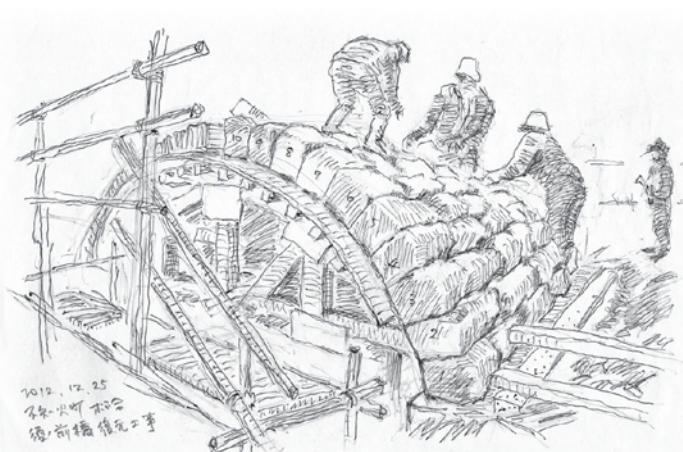
須ノ前橋復元工事風景。ジャッキアップした支保工の上に、解体され保存されていた輪石が積まれた(1.18)



須ノ前橋の復元工事風景。輪石の位置を並べ替え、支保工の上に置いてみる作業が繰り返された(1.8)

須ノ前橋 復元工事レポート

復元の前に求められる 確実な解体工事



イラスト／上塚 尚孝

年12月25日のレポートを一部紹介する。

◎ ◎ ◎

1999年は松合地区が高潮災害に見舞われた年。その年の暮れに浦ノ谷川に架かる3基のめがね橋（下須橋・宮ノ前橋・須ノ前橋）のうち、宮ノ前橋を不知火町文化財保護委員の方々と調査した。そのとき、15以下流の須ノ前橋を撤去する話が出ていた。

現場では「撤去を担当する業者は、撤去工事の経験がありますか」と役場関係者に聞くと、「ないでしょう」という返答。それでは復元のときに困るので、その場に同行をお願いしていた尾上さんに、解体マニュアルの作成を依頼した。

しかし今回、復元工事に掛かると、解体時にそのマニュアルが生かされていないことが分かった。例えば、輪石の石材は全部で91個ある。番号は記入してあるが、両脚部の水没していた箇所石材は不確か。そのため復元工事は、基礎を2段階むだけ何日もかかり、技術指導を行う竹部光春・師匠は、12月の降雨と海から吹く風の寒さも加わり、気分が悪くなられたほどである。…

輪石の切り口面がわずかにずれていることから、橋全体がやや斜めに架かっていた可能性もあるが、解体時の対角線計測値が残されていないので、分からずじまい。そんなことから復元工事は、予定を越え越年した。（上塚尚孝）

めがね橋の構造と強さ[3]

会員 軸丸英顕（熊本県）

写真提供
軸丸英顕

「強さ」を測る試み

今回はめがね橋の「強さ」を計算する試みを紹介します。この作業はとても複雑で大変なため、事例はまだ少数です。

① 西田橋

鹿児島市の西田橋は、移設時の検討で、現状のままに必要な「強さ」があると確認されました。

② 菖蒲橋

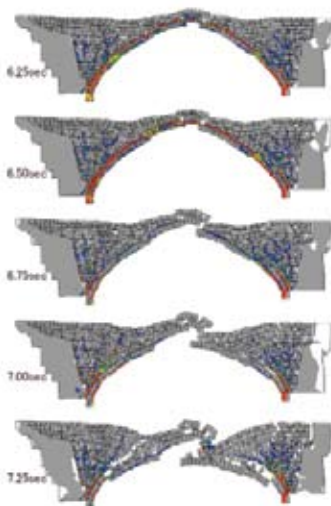
佐賀市の菖蒲橋移設の際には、九州大学の浅井光輝先生により、「離散型有限要素モデル」という手法で検討が行われました。これは石材を「バラバラなもの」として取り扱い、接触

面の摩擦をモデル化して石材間の力の伝達を測るものです。浅井先生は1個の輪石をさらに16の要素に分け、それぞれの境界に条件を設定して解析しています。

その結果、阪神淡路大震災規模の地震の揺れを受けた場合、左図のように橋の中央部から崩壊が起きることが確認されました。そこで、この弱点を補強するため、中央部にコンクリート板を載せる対策が採られました。

おわりに
昨年の九州北部豪雨では多くのめがね橋が破損しました。これからも大きな洪水や大規模地震が起きることは十分に考えられます。そこで、主なめがね橋については、あらかじめ、それぞれの特徴に基づく「強さ」の情報を整理しておくことが大事になると思います。

大規模地震の揺れによる
菖蒲橋の崩壊過程



出典／土木学会論文集

幸い、資料整理部の尽力で、全国のめがね橋のデータ整理がなされています。これに「強さ」の情報も加えることができれば、きつとめがね橋を使い守っていくための強力なツールになるのではないのでしょうか。（完）



移設された「菖蒲橋」（佐賀市）

夢は大きい方がいい

2012年夏の土用のまつただ中、山都町の清和文楽館西隣に建つ物産館の南側を流れる大矢川のほとりで、私は尾上一哉さんから次の言葉を聞いた。

「足元の橋台から向こう岸の橋台まで30メートルありますが、ここにめがね橋を架けようと考えています」

物静かな口調だが、その構想は極めて大きい。

「ということとは、明八橋(熊本市)のように扁平なアーチになりますね」と、私は問い返した。

「そうです。径間30メートルは、美里町の霊台橋以上ですから、単一アーチ橋では日本一になります」

そこには数年前まで木造橋が架かっていたが、現在は撤去されている。尾上さんはそこに、石造のアーチ橋を架設しようという夢を描いておられるのだった。

「輪石のサイズは通潤橋にあやかって60センチにしたいと思っています」と、構想は具体的である。

「それなら輪厚は60センチの1.5〜2倍は必要になりますね。球磨郡球磨村一勝地にかつて架かっていた扁平な石橋は、径間20メートルで輪厚は2倍ありました」

「はい、60×120センチの大きさの輪石を考えています。ただし、この付近の溶結凝灰岩はその大きさになると、ひびが入

つていて使えません」

「それじゃ、中国から花崗岩を取り寄せた方がいいですね」

「そうしたいと考えています」

2010年秋、尾上さんは中国・福建省に石橋の視察に行かれ、天然石材で架設された大径間の道路橋を詳しく見てこられた。建設会社の社長でもある尾上

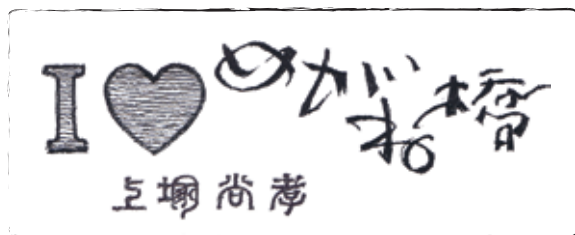
さんは、自分の手で大きな石橋を架けたいという夢を膨らませておられたのだ。

「径間30メートルの扁平アーチだと、路面の幅員を広くした方が安定するでしょうね。橋本勘五郎さんはそのことを東京で学習したようで、熊本の明八橋にそれが生かされて

ていると思いますよ」と私は言った。

「おっしゃる通り、広い方が丈夫で安定します。扁平な橋の場合は特に、路面の幅が狭いとねじれるという欠点が生じますから」

話を聞けば聞くほど、尾上さんの設計図は緻密に描かれていることが分かった。文楽の里に日本一の新しいめがね橋



欄干は遊び場

ができることが現実味を帯びてきた。種山石工養成講座の受講生も腕を磨くのに拍車が掛かりそうだった。私も長生きして、ぜひこの目で確かめたい。

(2012年8月8日)

「あん(あの)橋の欄干の上ば(を)、走って行きよった」と、同僚のSさんから子ども時代の話聞いたのは20年以上も前。橋というのは、熊本県下益城郡美里町小筵にある「二俣五橋」の中で、最も高い石造アーチ橋「年祢橋(としねばし)」のことである。「両手を水平に広げ、頭は橋の内側に傾けち(て)、走って



下鶴橋(熊本県下益城郡御船町) 写真提供/中村まさあき

行きよった」とSさんの話は続いた。橋の下を流れる釈迦院川の水面からの高さは24メートルもある。

戦中から戦後の時期の子どもは、「弁慶と牛若丸」の物語に夢中になったものだ。牛若丸は京都・五条の橋の欄干を走って弁慶と戦った。物語の牛若丸を真似て、子どもなりに平衡感覚を養い、身の安全を心掛けていたかもしれないが、あまりにも無謀。親が見たら、肝っ玉をつぶしたろう。

断つておくが、Sさんはその後、体操選手になることもなく、特技は緑川の鮎釣りだった。

似た話をもう一つ。

石匠館への来館者Hさんは、下益城郡御船町にある「下鶴橋」近くの住人。小学生のころは橋が遊び場だったそう。子どもたちにとって、橋の欄干に施された徳利(とっくり)や盃の透かし彫りよりむしろ、欄干の円柱状の手すりの方が興味的だったという。はだし草履(ぞうり)履きで、手すりの上を歩いていく芸当を披露していたそうである。誤って滑れば、14メートル下の川に落下する危険がある。

命がけの遊びは鉄棒の技、大和魂に似る。昔の子どもは、初心者のは上級生に手をつないでもらいながら足技を磨き、次第に上達していったそう。

(2011年2月18日)

<http://www.ishibashi-mamorukai.jp>



日本の石橋を守る会

検索

公式ホームページ開設 情報・原稿を募集中

これまで本会の情報を暫定ホームページで発信していたが昨年、独自ドメイン（上記インターネットのアドレス）を取得し、公式ホームページとして発信できるようになった。ページデザインを成田廉司・会員が担当。会の概要、会則、総会の様子、最近の会報、日本のめがね橋の都道府県別データほかを紹介している。

うになった。ページデザインを成田廉司・会員が担当。会の概要、会則、総会の様子、最近の会報、日本のめがね橋の都道府県別データほかを紹介している。

都道府県別データは資料整理部により、全国2046の石造アーチ橋と699のレンガアーチ橋が一覧表にまとめられ、橋名をクリックすると、各橋を画像入りで紹介するページが見られる。石橋を訪れる際に大変参考になるだけでなく、石橋研究の基礎データとして活用できるだろう。ホームページは、「日本の石橋を守る会」で検索すると出てくる。

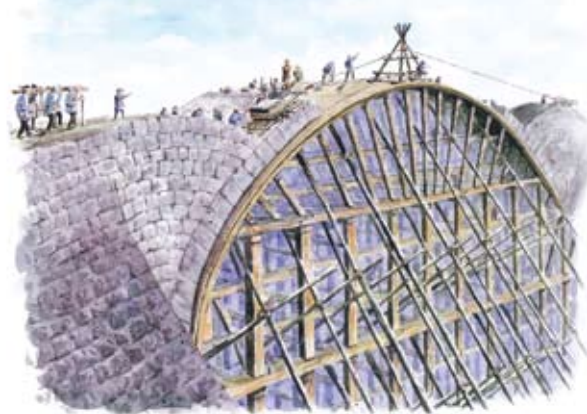
ホームページは今後、石橋保存活動の報告、石橋関連行事の情報発信、その他、研究レポートや詩・歌・絵・写真などの発表の場としても活用が可能だ。そこで石橋に興味を抱く人々の裾野を広げられるような、会員からの情報・原稿を募集している。（広報部）

日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報82号(通算) 2013(平成25)年3月7日発行

代表者 会長 甲斐 利幸
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>



國武 賢聖「通潤橋築造の場面」
絵本「通潤橋 水が渡る橋」より

国内最大の石造水路橋として名を知られた「通潤橋」。築造は白糸台地に水を送るため、地域の人々が心を合わせた一大事業だった。大工が巨大な支保工を築き、その上に石工が両岸から石を積んでいく。現場には石のみの音がコンコンと響き、重い石を引くため人々が声を合わせる。そしてみるみる、台地の裂け目に巨大な石のアーチがたがっていく。（水彩画）

「通潤橋 水が渡る橋」
先人の遺業を敬い
郷土愛あふれる絵本

苦心の末、通潤橋を完成させた先人の遺業を、透明感のある水彩画と子どもにも親しみやすい文章でまとめた絵本。通潤橋架橋150周年記念事業として企画された演劇脚本を基に、地元の郷土史家や石橋研究家の協力を得て制作された。人々が心を一つにして取り組むことの尊さも伝わってくる、郷土愛あふれる一冊。（広報部）



熊日(マイブック賞)受賞
通潤橋 水が渡る橋
画 國武 賢聖
編集 大林 美穂
熊日出版
定価(本体1,400円+税)

編集後記

本号で「2012年7月九州北部豪雨」による石橋被害、そして、石橋構築・修復技術者の養成を図る肥後種山石工技術継承講座の紹介をして思うことがありました。それは、観測史上記録的な豪雨にも耐えてみせた石橋の強さ（耐久性）と、一部損壊しても修復が可能な石橋の構造（可逆性）でした。

耐久性を「長持ちすること」、可逆性を「元に戻せること」と単純に言い換える、この2点は、私を含めた現代に暮らす多くの人々が、かつて高度経済成長期以後でしょつか時代代に合わないものとして切り捨ててしまった、実は大切なことだったような気がします。

（会報担当 中村まさあき）